

静岡新聞

慣習問わず 県内でも

自然葬、散骨クルーズ… 新しい葬送法 じわり浸透

慣習にとらわれず、新しい方法で死者を葬送する動きが少しずつ広がっている。生活様式や社会環境の変化により、従来型の墓が維持しにくくなっていることなどが背景にあり、県内でも寺院や企業などが、これまでと異なる葬送の様式を提案し始めている。

静岡市駿河区小鹿の法「樹木葬」。面積約千六百五十平方メートルの敷地に木は昨夏、自然葬墓地「光」や草花を植え、庭園風に「明苑」を開設した。モテ整えた。ルは、岩手県一ノ関市の「区画を設けて墓石を祥雲寺が先駆けとなり、建てる従来の墓と異なる、敷地内に設けた小



遺骨を自然に帰す自然葬墓地＝静岡市駿河区小鹿

遺灰活用の記念商品も登場

さな杭(くい)を自印に遺骨を地中に埋葬する。埋葬した後は目印に花木などを植える。

契約期間は埋葬後三十年で、経費は維持会費など総額五十五万円。宗教、宗派を問わず利用できるのが特徴という。

静岡市清水区の観光船運航会社エスパルストリームフェリーでは十年ほど前から、「葬送の自由をすすめる会」の仲介などにより、散骨のためのクルーズを提供している。一回二時間の航行で、料金は人数を問わず十



遺灰から合成したダイヤモンドを加工した指輪(アルゴダンザ・ジャパン提供)

円程度。当初は年間一、〇・三割四十四万円、二件だったが、最近は一割で二百七万円、一月に一件の利用がある。遺灰送付から十二週

程度で手元に届く。静岡市のボランティアグループ「二十一世紀の葬送を考える会」の外側は、遺灰から抽出した炭素のみで合成ダイヤモンドを作るビジネスを展開している。これまでに五人の遺族が契約を結んだ。「葬送の費用は分かりにくい。適正な価格かどうかを見極めることも大必要で、価格は最小の事」と話している。